

いなかの幼稚園での

不平不満の記

日々の生活が、幼稚園教員としての喜びに満たされているのみではなく、数知れぬ悩みに囲まれているのは、私ばかりだろうか。苦しみつつそれを克服することが社会での勉強なのかもしれない。

地図上では、東京から程遠からぬ小さな町、しかし文化の面では、かなり遠い封建的な町。そこに私の幼稚園がある。数年前附近の農村と合併して、名前だけは市になったものの、幼稚園の近くに水田が点在するような地域。園児の割は農家の子ども、四割が商家の子どもである。七割が一年保育である為、父母がやっと幼稚園の事を少しづつ理解しはじめる頃には卒園してしまう。

入園前の一日入園・説明会・その他の会合に、九割以上の優秀な出席率だったので、今年は、いろいろの計画に協力していただけたと期待しつつ入園式をむかえた。

四月十日

新しい先生がみつからぬままに、新学期が始まった。三十八名の園児を一人で扱うのは、経験の浅い私には、自信がない。しかししなければならぬのだ。この附近から大学に行く人は少なく、保育科など殆んどいない。時々いたとしても、労働条件の悪い地方幼稚園などに、目を向けてくれない。せめて高卒の適当な人でもいれば良いのに、就職率の良い今年では無理のようだ。

子どもが幼稚園に在る間は、本当に夢中だった。子どもを帰してホッとして職員室にもどってみると、仕事がたくさん残っていた。また、こんな一年が始まるのだ。

四月十七日

はじめてお弁当を持って来たので、十時前から気になって、落ち着いて遊べない子どもが、何人かいた。もう一週間位は、午前中保育にして幼稚園に親しませてから、時間を延長したかったが、母親は、少しでも長く子どもを幼稚園におきたがるようなので、仕方がなく十二時半までにした。

幼稚園という新しい世界に入って一週間、過労で病気になるたりしなければよいが、と気になる。

四月二十三日

母の会総会。出席者は、会員の三分の一のみだ。一番出やすい日として日曜日の午後を選んだが、こんなに少なかった。総会になど興味がないのかしら。

総会後に、「幼児の身体及び精神の発達について」の講演を計画された母の会役員の方達は、あまり出席率が少ないので、講師に言いわけをするのに苦しうだった。わざわざ遠路おいで下さった講師の先生には申しわけないが、会員が集まらないのだから仕方がない。もっとやわらかい会ならば、出席率が良いのかしら。

五月九日

快晴に恵まれ、徒歩約一時間の公園に遠足に行く。殆んど園児に附添いがいた。遠足となるとかくも参加者が多いのに驚く。普通は元気の良い子どもでも、お母さんと一しょの時には、相当に甘えている。家で子どもをあんなに育てているのでは、幼稚園でいくら努力しても効果は上らないのは当然だ。子どもの指導も大切ではあるが、母親の指導の方が、どうやら重要らしい。でも難しそう。春の光をいっぱい浴びて、楽しい一日だった。

五月十三日

子ども達の登園時刻が、あまり早いので、起床時間との関係を調べようとして質問紙を出した。どんな結果になるか楽しみだ。どの位もどってくるかしら。

五月二十三日

クラス全員の質問紙がもどって来た。その結果、母親の起床時間は、平均五時二十分（四時〜六時十五分）、子どもの平均起床時間は、六時三十五分（五時〜七時三十分）だった。八時三十分は幼稚園に着く為には、起きてから家を出るまでに一時間半の時間がある。一時間半が普通の準備に必要な時間だとすると、五時に起きる子どもが七時前に幼稚園に来てしまうのも、子どもの気持を考えると当然であろう。

六月八日

「お母様と一しょに話し合う会」のお知らせを子どもに渡す。はたしてどの位出席者がいるか不安な気持だ。先月は少しでも多くのお母様に出たであろうと、攻撃的な子ども中心の話し合い」と「ひっこみ思案な子ども中心の話し合い」と、問題を分けて、会も土曜・日曜の午後にしたのに、二人ずつしかお母様がいらっしやらなかった。今月は是非もど多く来てほしい。子ども達にも「お母さ

ん、幼稚園に来てね。」と言ってくれるよう頼んではみたものの、安心出来ない。

六月十三日

この地方では幼稚園は保育所化しなければならぬのだろうか。近くの幼稚園では、毎日四時まで保育を行なっているし、この幼稚園でも、母の会役員会で昼寝の問題が討議されたとか。朝七時に幼稚園に来て、五時に家に帰る。」という長時間保育を希望する者がいるほどでは、昼寝は当然しなければならぬことになるのだ。私としては一日十時間保育などは、幼稚園として不可能に近いことと思う。たとえ少人数でも、長時間幼稚園にいる子どもがあるのでは、勤務時間を一日八時間にするのは出来そうもない。母親が、こんな事を幼稚園に要求するのは、幼稚園というものとの不理解からのみ生ずるのだろうか。それが大部分かもしれない。しかし理解しようとしないうちに母親を相手に説明してもどうにもならない。社会福祉の分野を加味しなければ、入園希望者を減らすことになるのでは、幼稚園の経営に関する大問題にもなりかねない。私立保育所に比較すれば、労働条件はやや良いとはいえず、一般の平均からははるかに悪い。仕事自体からの収穫は多い。それを心の支柱として、悪条件に耐えねばならないのだ

ろうか。

こんな状態が続くようでは、幼児教育に関係する人を、一般から広く求めることは、ますます困難になってくるだろう。子どもの成長にとって大切な時期は、よりよい環境で過ごせるようにしてあげたい。幼稚園を子どもの楽園にする為には、優れた教師がひとりでも多く必要だ。未熟な私も良い教師になれるよう頑張ろう。

七月五日

「まだ六時五十分よ！」元氣な子どもの声にあわてて時計を見た私は思わず叫んでしまった。太陽はもう高いけれど、寝坊の私にはあまりにも早すぎる時間だ。

子どもが幼稚園に来ていれば出勤しないわけにはゆかぬ。今日も朝の時間がなくなってしまう。どうしてこんなに早くから来るんだろう。保育園だってもっと遅いだろうの。」と心の中で不平を言いながら、幼稚園での十一時間労働がはじまる。お母様達に幼稚園の始まる時間を無視されたようないやな気持だ。時計とは無関係に子どもはどんどん来てしまった。この調子では、夏休み中の夏期保育にはもっとひどくなるだろう。仕事から解放された時に感ずるのは疲労感で、研究心を感じずるファイトはなくなってしまう。(Y)